

障害者スポーツボランティア活動者の 意識変容と役割構造に関する研究

山田 力也

(西九州大学 健康福祉学部 社会福祉学科)

(平成18年12月22日受理)

Perspective Transformation and Role Structure of Volunteers for Disability Sports

Rikiya YAMADA

(*Department of Social Welfare Science, Nishikyushu University*)

(Accepted December 22, 2006)

Abstract

The aim of this study was to clarify the role structure of volunteers for disability sports and to examine how the role structure (i.e. task differences) influences on the perspective transformation regarding persons with disabilities. Major findings were (1) the perspectives of volunteers were positively transformed by experiencing volunteer activities in disability sports, and the positive transformation was significant for volunteers who had direct contacts with the athletes, (2) the factor analysis extracted four factors of volunteers' perspectives regarding persons with disabilities, and the perspective transformation in those four factors were similar to the above. Those findings imply that the role structure (i.e. task differences) of volunteers for disability sports influenced their perspective transformation regarding persons with disabilities.

Key words : disability sports 障害者スポーツ
sport volunteer スポーツボランティア
role structure 役割構造
perspectives on person with disabilities 障害者意識
perspective transformation 意識変容

1. はじめに

今や各種スポーツイベントは、障害者スポーツイベントに限らずともそれを支えるボランティア抜きには開催実現がなされないほど重要な役割を担っていることは周知の事実である。このような状況に応じて、ボランティアおよびその活動に関心が集まると同時に、様々な視点からの評価、研究による報告がなされてきている。各種スポーツ活動におけるボランティアをスポーツボランティアと呼ぶが、これまで、スポーツボランティアに関する研究は、綿ら(1989)¹⁾や山口ら(1989)²⁾、そして長ヶ原ら(1991)³⁾によるスポーツボランティアの活動継続意欲を規定する要因に関する研究。スポーツボランティアの活動状況や活動意識に関連したものとしては、松尾(1998)⁴⁾の研究や工藤ら(1995)⁵⁾の調査報告が挙げられる。さらには、スポーツボランティアの関係を「する／受ける」の関係とした場合、これまで「する」側に着目したものが主であったが、逆に「受ける側」に着目した萌芽的研究が松尾(1997)⁶⁾や山田(2002)⁷⁾によっても報告されている。しかし、これらの研究にはスポーツボランティア活動を経験することによって変化するであろうボランティア活動者自身の意識「ボランティア活動者個人の意識変容」に着目した研究はほとんど見られない。

ボランティア活動者個人の意識変容について、川元⁸⁾は、ボランティア活動者個人の変容はボランティア活動が特定の対象に及ぼす影響(効果)のひとつに過ぎないということを前提にしつつも、「ボランティア活動の活動者個人に対する影響」の実証的研究の必要性を説いている。

2. 研究の目的

そこで本研究では、スポーツボランティアにおけるボランティア活動者個人の意識の変容を探るべく、2002年に開催された「2002年世界車椅子バスケットボール選手権大会・北九州(以下、ゴールドカップとする)」を支えた障害者スポーツボランティア活動者を対象に、障害者スポーツボランティアがそれに従事するボランティア活動者の意識にどのような変容もたらし、そして、その意識変容にボランティアの役割構造(具体的役割内容)がどのように影響しているのか、その関係性を明らかにすることを目的とする。

3. 調査の概要及び質問項目構造

1) 調査概要

本研究では、「ゴールドカップ」における一般ボラン

ティア参加者883名を対象に、大会開催後の同年11月1日～11月25日の期間に質問紙を用いた郵送法による社会調査を実施した。

その結果、回収数は411部、回収率は46.5%であった。そのうち、以下の分析に耐えうる質問紙、有効回答数は350部だったことから、有効回収率は39.6%である。

2) 質問項目構造

① 基本的属性

「性別」、「年齢」、「ゴールドカップ以前のボランティア活動の有無及び、活動頻度」を設定した。

② 障害者スポーツボランティア活動によるボランティアの障害者意識測定尺度の設定

川元⁸⁾は、「ボランティア活動による活動者個人の変容」の代表的な検討視点を提示⁹⁾している。これらの視点を検討する上での測定尺度の中でも、同氏ら⁸⁾による「学習個人が(福祉教育・ボランティア学習活動の結果として)即時的に変容する具体的な行動、態度、志向に関する項目(全47項目構成)」は、本研究の「障害者スポーツボランティア活動によるボランティアの意識変容」を測定するにあたり最も有効であることが想定される。よって、この川元らの測定尺度から選択した16項目と、新たに1項目加えた全17項目を質問項目として設定した。

③ バリアフリー意識

上記②を補完する上で、ボランティアのバリアフリー意識についての質問項目を設定した。

4. 分析方法

本研究の目的を検討すべく、得られたデータを分析するにあたり、ボランティアの役割構造(具体的役割内容)に応じて想定されるクライアント(特に、車椅子バスケットボール選手。以下も同じ。)との空間的・関係的な近接性を基にグループを設定した。

1つ目は、クライアントと直接的に関係を持つ(空間的・関係的に近い)グループ「直接的ボランティア群(選手帯同係、選手村サービス係など5つの係)」、逆に、クライアントとの直接的な関係を持つことが無い(空間的・関係的に遠い)グループ「間接的ボランティア群(総務係、AD係など10の係)」、最後に、その両者でもないグループ「中間的ボランティア群(入場券販売、インフォメーション係など6つの係)」の3グループである(表1参照)。そして、それぞれのグループを独立変数、各質問項目を従属変数としたクロス集計を実施した。

表1 活動形態のグループ化

		N (%)			
		全 体	直 接	中 間	間 接
選手村本部	総務係	31 (8.9)	-	-	31 (32.6)
	インフォメーション・大会記録係	4 (1.1)	4 (3.8)	-	-
	サービス係	50 (14.3)	50 (48.1)	-	-
	車椅子管理係	7 (2.0)	7 (6.7)	-	-
	設営・運営係	4 (1.1)	-	-	4 (4.2)
	受付・接待係	4 (1.1)	-	-	4 (4.2)
会場本部	総務係	18 (5.1)	-	-	18 (18.9)
	受付・渉外係	10 (2.9)	-	-	10 (10.5)
	AD係	14 (4.0)	-	-	14 (14.7)
	物品配給係	13 (3.7)	-	13 (8.6)	-
	インフォメーション係	21 (6.0)	-	21 (13.9)	-
	入場券販売係	9 (2.6)	-	9 (6.0)	-
	入場者管理係	53 (15.1)	-	53 (35.1)	-
	入場者管理係	54 (15.4)	-	53 (35.1)	-
	ADチェック係	1 (0.3)	-	1 (0.7)	-
	交通誘導係	-	-	-	-
	広報係	5 (1.4)	-	-	5 (5.3)
	報道係	6 (1.7)	-	-	6 (6.3)
	TV放映係	2 (0.6)	-	-	2 (2.1)
	医事衛生	-	-	-	-
式典部	式典総務係	1 (0.3)	-	-	1 (1.1)
	フロア係	-	-	-	-
	誘導係	2 (0.6)	2 (1.9)	-	-
選手帯同部	選手帯同係	41 (11.7)	41 (39.4)	-	-
合 計		350 (100.0)	104 (100.0)	151 (100.0)	95 (100.0)

また、川元らの測定尺度から選択した16項目と、新たに1項目加えた全17項目による障害者スポーツボランティアの障害者意識変容測定項目については、探索的な因子分析を行ない、特性因子を抽出し、社会的属性および関連項目、ならびに上記のボランティアの役割構造別の3つのグループとの比較分析を実施した。

なお、集計・分析にはSPSS for Windows 11.0を用い、検討内容に応じてカイ二乗検定、因子分析および分散分析を用いた。

5. 結果及び考察

1) 基本的属性

まず、性別では、全体で女性76.3%、男性23.7%であった。グループ別では、どのグループも女性の割合が7割を超えているが、直接的ボランティア群に占める女性の割合が85.6%と他のグループより高くなっている。また、全体の平均年齢は、35.7歳(SD=18.4)であり、直接的ボランティア群32.8歳(SD=15.5)と間接的ボランティア群41.6歳(SD=17.2)の差は約11歳である(表2参照)。

表2 基本的属性

		N (%)			
		全 体	直 接	中 間	間 接
性別	男性	83 (23.7)	15 (14.4)	41 (27.2)	27 (28.4)
	女性	267 (76.3)	89 (85.6)	110 (72.8)	68 (71.6)
	合計	350 (100.0)	104 (100.0)	151 (100.0)	95 (100.0)
年代	10代	101 (28.9)	26 (25.0)	67 (44.4)	8 (8.5)
	20代	67 (19.2)	26 (25.0)	21 (13.9)	20 (21.3)
	30代	45 (12.9)	18 (17.3)	6 (4.0)	21 (22.3)
	40代	42 (12.0)	16 (15.4)	12 (7.9)	14 (14.9)
	50代	36 (10.3)	10 (9.6)	15 (9.9)	11 (11.7)
	60代	45 (12.9)	7 (6.7)	24 (15.9)	14 (14.9)
	70以上	13 (3.7)	1 (1.0)	6 (4.0)	6 (6.4)
	合計	349 (100.0)	104 (100.0)	151 (100.0)	94 (100.0)
	平均 (SD)		35.7 (18.4)	32.8 (15.5)	33.9 (20.1)

2) ボランティア活動状況

ゴールドカップ以前の活動の有無について、各グループともに「ある」が6割を超える値を示した(表3参照)。しかし、カイ二乗検定の結果、有意差は認められていないものの、各グループの「週1日以上(週に3日以上+

週に1~2日)の定期的ボランティア従事者は、直接的ボランティア群14.3%、中間的ボランティア群21.3%、間接的ボランティア群29.1%となっており、間接的ボランティア群の活動頻度の値が高い。

表3 ゴールドカップ以前のボランティア活動及び頻度

		全体	直接	中間	間接	N (%)	p
ボランティア活動の有無	ある	219 (62.6)	63 (60.6)	94 (62.3)	62 (65.3)	n. s.	
	ない	131 (37.4)	41 (39.4)	57 (37.7)	33 (34.7)		
	合計	350 (100.0)	104 (100.0)	151 (100.0)	95 (100.0)		
活動頻度	週に3日以上(年151日以上)	10 (4.6)	2 (3.2)	4 (4.3)	4 (6.5)	n. s.	
	週に1~2日(年51~150日)	37 (16.9)	7 (11.1)	16 (17.0)	14 (22.6)		
	月に1~3日(年12~50日)	64 (29.2)	20 (31.7)	27 (28.7)	17 (27.4)		
	3ヶ月に1~2日(年4~11日)	42 (19.2)	18 (28.6)	14 (14.9)	10 (16.1)		
	年に1~3日	66 (30.1)	16 (25.4)	33 (35.1)	17 (27.4)		
	合計	219 (100.0)	63 (100.0)	94 (100.0)	62 (100.0)		

3) 障害者スポーツボランティア活動前後の障害者意識

さて、障害者スポーツボランティア活動はボランティアの意識にどのような影響を及ぼすのだろうか。ここでは、上述した通り、川元らの測定尺度を参考に、障害者意識を測定するのに妥当だと考えられるものを17項目設定し、それぞれに対するボランティア自身の意見を「1. とても、あてはまる」から「5. まったく、あてはまらない」の5件法によって訊ねた。結果の分析にあたっては、回答カテゴリーを間隔尺度とみなし、それぞれの項目ごとに3群の平均値の比較検定(分散分析)を

行った。結果を、「活動前」、「活動後」、そして「前後の差」の順で見えていくことにする。

(1) 活動前

まず、活動前の結果(表4参照)を見てみると、最も肯定傾向を示している項目は3群共に⑩「今の日本では、障害のある方が、今の自分と同じ生活をしようとする、多くの困難に直面すると思う」となっている。3群間の値の比較においては、⑧「障害のある方と接している自分が、世間からどう見られているかが気にならない」の項目のみ5%の危険率で有意差が認められており、直接的ボラ

表4 障害者に対する意識(活動前)

	全体	直接	中間	間接	p
①自分は、障害のある方に対して偏見を持っていない	2.33(1.10)	2.41(1.01)	2.33(1.15)	2.24(0.98)	n. s.
②自分は、知らず知らずのうちに、障害のある方を差別していない	2.35(1.12)	2.30(1.01)	2.45(1.17)	2.25(0.99)	n. s.
③障害のある方は、自分とはあまり関係のない「別の世界の人」だと思わない	2.03(1.07)	2.14(1.16)	1.99(1.03)	1.99(1.05)	n. s.
④障害のある方は、自分とあまり違いのない「普通の人」だと思う	2.28(1.10)	2.25(1.08)	2.28(1.05)	2.33(1.22)	n. s.
⑤障害のある方と、もっと話がしたい、もっと相手を知りたいと思う	2.37(1.03)	2.28(0.96)	2.33(1.09)	2.55(0.99)	n. s.
⑥障害のある方が楽しそうな顔をしていると、自分もうれしくなる	1.84(0.97)	1.83(0.93)	1.86(1.04)	1.81(0.92)	n. s.
⑦障害のある方が困っているのを、他人事とは思えない	1.98(0.99)	1.97(0.98)	1.98(1.02)	1.98(0.97)	n. s.
⑧障害のある方と接している自分が、世間からどう見られているかが気にならない	1.98(1.13)	1.77(0.99)	2.18(1.20)	1.88(1.09)	*
⑨今の社会には、障害のある方が普通の生活をできないような、さまざまな障壁が多いことに気づいている	2.00(0.96)	1.95(0.90)	2.05(1.01)	1.97(0.97)	n. s.
⑩今の日本では、障害のある方が、今の自分と同じ生活をしようとする、多くの困難に直面すると思う	1.66(0.85)	1.75(0.90)	1.71(0.91)	1.49(0.64)	n. s.
⑪建物入り口のスロープなど、障害のある方に配慮した設備があると自分もうれしくなる	1.94(1.04)	1.92(1.00)	2.04(1.01)	1.79(0.92)	n. s.
⑫障害のある方は、「障害者」と呼ばれると、「いい気がしないだろうな」と思う	1.84(0.98)	1.83(0.98)	1.94(1.06)	1.69(0.84)	n. s.
⑬障害のある方は、それぞれ人間として個性的な魅力があると思う	1.87(0.94)	1.84(0.88)	1.94(1.01)	1.80(0.89)	n. s.
⑭障害のある方に対して、「はれもの」にさわるような接し方はしない	2.60(1.10)	2.52(1.13)	2.54(1.07)	2.79(1.10)	n. s.
⑮障害のある方だからといって、遠慮ばかりするのではなく、人間として普通に接している	2.46(1.05)	2.48(1.07)	2.50(1.13)	2.38(0.91)	n. s.
⑯障害のある方が、世間から不当な扱いをされたのを見聞きすると、「なぜ、こんな社会なんだろう」と考えることがある	2.00(0.94)	2.08(0.96)	1.97(0.97)	1.96(0.89)	n. s.
⑰障害のある人にとって使いやすい設備は、だれにとっても使いやすいものだと思う	2.04(1.09)	1.97(1.07)	2.14(1.14)	1.94(0.99)	n. s.
平均	2.09(1.03)	2.08(1.02)	2.13(1.07)	2.05(0.96)	

*=p<.05

表5 障害者に対する意識（活動後）

	全体	直接	中間	間接	p
①自分は、障害のある方に対して偏見を持っていない	1.87(0.90)	1.84(0.87)	1.76(0.87)	2.07(0.95)	*
②自分は、知らず知らずのうちに、障害のある方を差別していない	1.92(0.92)	1.82(0.86)	1.94(0.95)	2.03(0.95)	n. s.
③障害のある方は、自分とはあまり関係のない「別の世界の人」だと思わない	1.63(0.77)	1.59(0.73)	1.60(0.74)	1.74(0.86)	n. s.
④障害のある方は、自分とあまり違いのない「普通の人」だと思ふ	1.99(1.15)	1.77(1.02)	2.03(1.16)	2.18(1.24)	*
⑤障害のある方と、もっと話がしたい、もっと相手を知りたいと思う	2.02(0.99)	1.79(0.77)	1.97(1.05)	2.37(1.00)	***
⑥障害のある方が楽しそうな顔をしていると、自分もうれしくなる	1.59(0.88)	1.39(0.63)	1.64(0.96)	1.72(0.95)	*
⑦障害のある方が困っているのを、他人事とは思えない	1.71(0.85)	1.63(0.73)	1.71(0.91)	1.80(0.88)	n. s.
⑧障害のある方と接している自分が、世間からどう見られているかが気になる	1.78(1.06)	1.57(0.95)	1.93(1.13)	1.74(1.02)	*
⑨今の社会には、障害のある方が普通の生活をできないような、さまざまな障壁が多いことに気づいている	1.68(0.83)	1.62(0.76)	1.73(0.89)	1.64(0.78)	n. s.
⑩今の日本では、障害のある方が、今の自分と同じ生活をしようとすると、多くの困難に直面すると思う	1.47(0.74)	1.43(0.62)	1.56(0.87)	1.35(0.60)	n. s.
⑪建物入り口のスロープなど、障害のある方に配慮した設備があると自分もうれしくなる	1.58(0.84)	1.46(0.78)	1.69(0.91)	1.54(0.75)	n. s.
⑫障害のある方は、「障害者」と呼ばれると、「いい気がしないだろうな」と思う	1.71(0.95)	1.57(0.79)	1.86(1.10)	1.64(0.80)	*
⑬障害のある方は、それぞれ人間として個性的な魅力があると思う	1.59(0.84)	1.51(0.75)	1.62(0.92)	1.62(0.82)	n. s.
⑭障害のある方に対して、「はれもの」にさわるような接し方はしない	2.22(1.03)	2.05(0.99)	2.17(1.01)	2.51(1.05)	**
⑮障害のある方だからといって、遠慮ばかりするのではなく、人間として普通に接している	2.21(1.06)	2.13(1.02)	2.26(1.16)	2.22(0.91)	n. s.
⑯障害のある方が、世間から不当な扱いをされたのを見聞きすると、「なぜ、こんな社会なんだろう」と考えることがある	1.77(0.89)	1.73(0.75)	1.75(0.99)	1.85(0.86)	n. s.
⑰障害のある人にとって使いやすい設備は、だれにとっても使いやすいものだと思う	1.90(1.07)	1.77(1.00)	1.98(1.15)	1.90(1.00)	n. s.
平均	1.80(0.93)	1.69(0.83)	1.84(0.99)	1.88(0.91)	

***=p<.001 **=p<.01 *=p<.05

ンティア群により肯定傾向が認められた。しかし、各群の平均値の比較と3群間の値の比較において有意差が認められた項目が1つだけにとどまったことを勘案すると、3群間の全体的傾向としてさほど違いが見られない。

(2) 活動後

次に、活動後の障害者意識（表5参照）について、各群の平均値を見てみると、直接的ボランティア群1.69（SD=0.83）、中間的ボランティア群1.84（SD=0.99）、間接的ボランティア群1.88（SD=0.91）となっており直接的ボランティア群と他の2群に差が見られる。最も

表6 障害者に対する意識変容値（活動前－活動後）

	全体	直接	中間	間接
①自分は、障害のある方に対して偏見を持っていない	0.46	0.57	0.57	0.17
②自分は、知らず知らずのうちに、障害のある方を差別していない	0.42	0.48	0.51	0.21
③障害のある方は、自分とはあまり関係のない「別の世界の人」だと思わない	0.40	0.54	0.39	0.25
④障害のある方は、自分とあまり違いのない「普通の人」だと思ふ	0.29	0.48	0.25	0.15
⑤障害のある方と、もっと話がしたい、もっと相手を知りたいと思う	0.35	0.49	0.35	0.18
⑥障害のある方が楽しそうな顔をしていると、自分もうれしくなる	0.25	0.44	0.22	0.09
⑦障害のある方が困っているのを、他人事とは思えない	0.26	0.34	0.27	0.18
⑧障害のある方と接している自分が、世間からどう見られているかが気になる	0.20	0.21	0.24	0.14
⑨今の社会には、障害のある方が普通の生活をできないような、さまざまな障壁が多いことに気づいている	0.32	0.33	0.32	0.32
⑩今の日本では、障害のある方が、今の自分と同じ生活をしようとすると、多くの困難に直面すると思う	0.20	0.31	0.15	0.15
⑪建物入り口のスロープなど、障害のある方に配慮した設備があると自分もうれしくなる	0.35	0.46	0.35	0.24
⑫障害のある方は、「障害者」と呼ばれると、「いい気がしないだろうな」と思う	0.13	0.26	0.09	0.06
⑬障害のある方は、それぞれ人間として個性的な魅力があると思う	0.28	0.33	0.32	0.18
⑭障害のある方に対して、「はれもの」にさわるような接し方はしない	0.37	0.47	0.37	0.28
⑮障害のある方だからといって、遠慮ばかりするのではなく、人間として普通に接している	0.25	0.35	0.24	0.16
⑯障害のある方が、世間から不当な扱いをされたのを見聞きすると、「なぜ、こんな社会なんだろう」と考えることがある	0.23	0.35	0.22	0.10
⑰障害のある人にとって使いやすい設備は、だれにとっても使いやすいものだと思う	0.14	0.20	0.16	0.04
平均	0.29	0.39	0.29	0.17

肯定傾向を示している項目は、直接的ボランティア群は⑥「障害のある方が楽しそうな顔をしていると、自分もうれくなる」1.39 (SD=0.63) となっているが、中間的ボランティア群と間接的ボランティア群はそれぞれ、1.56 (SD=0.87) と 1.35 (SD=0.60) の値で⑩「今の日本では、障害のある方が、今の自分と同じ生活をしようとする、多くの困難に直面すると思う」となっている。さらに、3群間の比較において有意差が認められた項目は、それぞれ①、④、⑤、⑥、⑧、⑫、⑭の7項目である。

(3) 活動前後の差

では、障害者意識に対する障害者スポーツボランティア活動前と後の値の差はどうなっているのだろうか。ここでは、活動前の値から活動後の値を引いた値を表6に示している。

全体的傾向として、ボランティア活動を経験することによって障害者意識がプラスに影響していることが明らか(0.29)である。障害者意識に最も影響(効果)があった項目は、直接的ボランティア群、中間的ボランティア

群共に①「自分は、障害のある方に対して偏見を持っていない」、その差も同じく0.57。間接的ボランティア群では、0.32の差で⑨「今の社会には、障害のある方が普通の生活をできないような、さまざまな障壁が多いことに気づいている」となっている。さらに、注目すべき点としては、各群の活動前と活動後の平均の差である。その差は、直接的ボランティア群0.39、中間的ボランティア群0.29、間接的ボランティア群0.17とそれぞれのグループに及ぼす影響(効果)に差異が認められた。

以上、ボランティア活動実施前後の障害者意識について、その前後の値の差からも明らかなように、差異が認められた。また、クライアントとの空間的・関係的な近接性を基にグループ分けされた3群間によってもその影響(効果)の程度に違いがあることが示唆された。

4) バリアフリー意識

また、ゴールドカップの開催地である北九州市のバリアフリー対策に対して、どう思うか訊ねたところ以下のような結果が得られた(表7参照)。

表7 バリアフリー意識

	全 体	直 接	中 間	間 接	N (%)
十分対応している	25 (7.3)	5 (4.8)	14 (9.5)	6 (6.5)	
ある程度対応している	177 (51.5)	51 (49.0)	66 (44.6)	60 (65.2)	
やや対応不十分	114 (33.1)	41 (39.4)	53 (35.8)	20 (21.7)	
全く対応不十分である	28 (8.1)	7 (6.7)	15 (10.1)	6 (6.5)	
合 計	344 (100.0)	104 (100.0)	148 (100.0)	92 (100.0)	

p<.05

表8 障害者スポーツボランティアの障害者意識に関する因子分析(回転後の因子負荷行列)

	F1	F2	F3	F4
⑥障害のある方が楽しそうな顔をしていると、自分もうれくなる	.803			
⑦障害のある方が困っているのを、他人事とは思えない	.761			
⑤障害のある方と、もっと話したい、もっと相手を知りたいと思う	.703			
④障害のある方は、自分とあまり違いのない「普通の人」だと思う	.618			
⑩今の日本では、障害のある方が、今の自分と同じ生活をしようとする、多くの困難に直面すると思う		.701		
⑨今の社会には、障害のある方が普通の生活をできないような、さまざまな障壁が多いことに気づいている		.696		
⑫障害のある方は、「障害者」と呼ばれると、「いい気がしないだろうな」と思う		.564		
⑬障害のある方が、世間から不当な扱いをされたのを見聞きすると、「なぜ、こんな社会なんだろう」と考えることがある		.555		
⑪建物入り口のスロープなど、障害のある方に配慮した設備があると自分もうれくなる		.552		
⑰障害のある人にとって使いやすい設備は、だれにとっても使いやすいものだと思う		.539		
①自分は、障害のある方に対して偏見を持っていない			.888	
②自分は、知らず知らずのうちに、障害のある方を差別していない			.849	
③障害のある方は、自分とはあまり関係のない「別の世界の人」だと思わない			.615	
⑮障害のある方だからといって、遠慮ばかりするのではなく、人間として普通に接している				.669
⑧障害のある方と接している自分が、世間からどう見られているかが気にならない				.570
⑱障害のある方に対して、「はれもの」にさわるような接し方はしない				.531
固 有 値	4.548	2.172	1.342	1.000
因 子 寄 与 率 (%)	26.8	12.8	7.9	5.9
累 積 寄 与 率 (%)	26.8	39.5	47.4	53.3

注) F1-F4に含まれなかった項目⑬は記載していない

全体では、「不十分(やや+全く)」と回答した者の割合が4割を超えている。また、3群間の値を見てみると「不十分」と回答している者の割合が28.2%を示している間接的ボランティア群に対して、中間的ボランティア群で45.9%、直接的ボランティア群では46.1%とさらに上昇している。また、この値の差には、5%水準の危険率で有意差が認められている。

5) 障害者スポーツボランティアの意識に関する因子分析

ここでは、障害者スポーツボランティアの意識変容についてさらに詳細に検討していくため、障害者スポーツボランティアの「ボランティア活動後」の障害者意識結果を基に因子分析を試みた。固有値1.0以上の因子にバ

リマックス法による因子軸の直交回転を行なったところ、以下に示す4つの因子が抽出された。なお、全体の累積寄与率は53.3%であった(表8参照)。

まず、第1因子は、項目⑥(.803)、⑦(.761)、⑤(.703)、④(.618)から構成されており、これらは、障害者との親密性を意味していることから「親密性因子」と命名した。

第2因子は、項目⑩(.701)、⑨(.696)、⑫(.564)、⑯(.555)、⑪(.552)、⑰(.539)から構成されており、これらは、ノーマライゼーションに基づく障害者の社会環境に対する認識を意味していることから「環境認識因子」と命名した。

第3因子は、項目①(.888)、②(.849)、③(.615)から構成されており、これらは、障害者に対する偏見や差別意識を意味していることから「偏見・差別因子」と命名した。

最後の第4因子については、項目⑮(.669)、⑧

(.570)、⑭(.531)から構成され、これらは、障害者との接し方や関係の持ち方に関する意味を表していることから「尊厳性因子」と命名した。

6) 障害者スポーツボランティアの障害者意識要因と関連項目の関係性

上記の因子分析によって抽出された因子ごとに因子得点を算出した上で、分散分析を用いて社会的属性および関連項目、ならびにボランティアの3つの役割構造別グループとの比較を順に見ていくことにする。

(1) 障害者ボランティアの障害者意識要因と社会的属性および関連項目との比較

ここでは、障害者ボランティアの4つの障害者意識要因と「性別」、「年齢(年代)別」、「ゴールドカップ以前のボランティア活動経験の有無別」、「今後のボランティア活動参加意識の有無別」、「バリアフリー意識別」の5つの項目それぞれで多重比較を行なった(表9参照)。

表9 障害者ボランティアの障害者意識要因と関連項目の分散分析

	親密性因子		環境認識因子		偏見・差別因子		尊厳性因子	
性別	女性>男性	***	女性>男性	***	女性>男性	n. s.	女性>男性	**
年齢(年代)別	10>50>20>70 >30>40>60	*	50>40>30>20 >10>60>70	n. s.	70>60>20>50 >10>30>40	**	50>40>30>20 10>60>70	n. s.
ボランティア活動経験の有無別(大会前)	有 > 無	n. s.	有 > 無	n. s.	有 > 無	*	有 > 無	n. s.
今後のボランティア活動参加意識の有無別	有 > 無	***	有 > 無	n. s.	有 > 無	**	有 > 無	*
バリアフリー意識別	不十分>十分	n. s.	不十分>十分	***	不十分>十分	n. s.	不十分>十分	n. s.

***=p<.001 **=p<.01 *=p<.05

その結果、「親密性因子」に関しては、性別と今後のボランティア活動参加意識別において0.1%、年齢別で5%の危険率で有意差が認められ、10代の女性で今後のボランティア活動参加意識があるものほど障害者との親密性が強い傾向を示した。

次に、「環境認識因子」に関しては、性別とバリアフリー意識別において0.1%の危険率で有意差が認められ、女性でバリアフリー意識があるものほど環境認識が強い傾向を示した。

「偏見・差別因子」に関しては、年齢別と今後のボラ

ンティア活動参加意識別において1%、大会以前のボランティア活動経験別で5%の危険率で有意差が認められ、70代で大会以前にボランティア活動経験を持ち、今後も継続的に参加していく意識があるものほど偏見・差別に強く否定的傾向を示した。

「尊厳性因子」に関しては、性別で1%、今後のボランティア活動参加意識別において5%の危険率で有意差が認められ、女性でボランティア活動への継続的参加を意識するものほど強い尊厳性傾向を示した。

表10 障害者ボランティアの障害者意識要因と役割構造別意識レベルの比較

	意識レベル	p
親密性因子	直接 > 中間 > 間接	***
環境認識因子	直接 > 間接 > 中間	**
偏見・差別因子	直接 > 中間 > 間接	n. s.
尊厳性因子	直接 > 中間 > 間接	**

***=p<.001 **=p<.01

(2) 障害者スポーツボランティアの障害者意識要因と役割構造別グループの意識レベルの比較

続いて、障害者スポーツボランティアの障害者意識要因と、ボランティアの役割構造を基に分けられた3つのグループそれぞれの意識レベルを比較した(表10参照)。

その結果、「環境認識因子」を除いた3つの因子については「直接的ボランティア群」、「中間的ボランティア群」、「間接的ボランティア群」の順で意識レベルが強かった。さらに、全ての因子において「直接的ボランティア群」の意識レベルがより強い傾向を示した。また、「親密性因子」において0.1%水準、「環境認識因子」および「尊厳性因子」において1%水準でそれぞれ有意差が認められた。

6. まとめ

本研究は、障害者スポーツボランティアがそれに従事するボランティア活動者の意識にどのような変容をもたらすのか。また、スポーツボランティアの役割構造からみた、クライアントとの空間的・関係的な近接性の違いに着目し、その役割の違いがボランティアの意識変容にどのように影響しているのかについて、その関係性を検討した。

- 1) 障害者スポーツボランティア活動によるボランティアの活動前と活動後との障害者意識には差異が認められ、活動後により肯定的意識が高まる影響(効果)をもたらすことが示唆された。また、障害者意識の変容の程度は、障害者との空間的・関係的な近接性の違いによって異なり、障害者と直接的に関係を持つ機会が多いほど意識の変化にプラス効果が作用されることが明らかになった。また、その意識変容は身近なバリアフリー対策に対する意識にまで影響(効果)を及ぼすことが示唆された。
- 2) 障害者スポーツボランティアの障害者意識要因については、「親密性因子」、「環境認識因子」、「偏見・差別因子」、「尊厳性因子」の4つが抽出された。「親密性因子」においては、10代の女性で今後のボランティア活動参加意識があるものほど障害者との親密性が強く、「環境認識因子」においては、女性でバリアフリー意識があるものほど環境認識が強い。そして、「偏見・差別因子」においては、70代で大会以前にボランティア活動経験を持ち、今後も継続していく意思があるものほど偏見・差別に強く否定的であり、「尊厳性因子」においては、女性で継続的にボランティア活動に参加する意識があるものほど尊厳傾向が強いことなど、各因子と関係項目との関係性が明らかになった。そして、全ての因子において障害者と直接的に関係を持つグループ「直接的ボランティア群」がより強い意識レベルの

傾向を示したことから、ボランティアの役割構造(具体的役割内容)に応じて想定されるクライアントとの空間的・関係的な近接性の違いは、障害者スポーツボランティアの意識に対して異なった影響(効果)をおよぼすことが示唆された。

注1) 川元は、「ボランティア活動による活動者個人の変容」の代表的な視点として「自尊感情」、「自己実現傾向」、「援助規範意識」、「向社会的行動」、「社会的効力感」、「福祉教育・ボランティア学習活動による参加者個人の変容」、「サービスマネジメントにおける評価視点」、「ボランティア活動意欲」の8つを挙げ、さらに、それぞれに対応する測定尺度も提示している。

7. 参考・引用文献

- 1) 綿裕二・野川春男・山口泰雄・菊池秀雄, スポーツイベントにおけるボランティア活動の継続意欲に関する研究, レクリエーション研究 19, pp.48-49, 1989.
- 2) 山口泰雄・菊池秀雄・野川春男, スポーツイベントにおけるボランティア活動の継続要因の分析, 日本体育学会第40回大会号, p.158, 1989.
- 3) 長ヶ原誠・山口泰雄・野川春男・菊池秀雄, スポーツイベントのマネジメントに関する研究(2), 鹿屋体育大学研究紀要, 第6号, pp.69-76, 1991.
- 4) 松尾哲矢, スポーツボランティア活動参与の規定要因に関する実証的研究, 福岡大学体育研究, 第28巻2号, pp.33-51, 1998.
- 5) 工藤保子, スポーツボランティアに関する調査研究, 日本体育学会第46回大会号, p.205, 1995.
- 6) 松尾哲矢, スポーツボランティアの原則と今後の課題, コーチング・クリニック, vol.11, No 9, pp.78-80, 日本体育社, 1997.
- 7) 山田力也, 身体障害者スポーツ実施者からみた<クライアント-ボランティア>関係に関する研究, レジャー・レクリエーション研究第48号, pp.1-11, 2002.
- 8) 川元克秀・佐藤陽・菊田英代子・松尾索・諏訪徹・土井進・中島修・高野利雄・柴田博: 福祉教育・ボランティア学習活動による学習者の即時的変容の内容とその意味, 日本福祉教育・ボランティア学習学会年報, 4, 82-110, 1999.
- 9) 川元克秀, 福祉教育・ボランティア学習活動参加後の学習者のボランティア活動意欲の変容, 社会福祉学, 41, 1, pp. 121-134, 2000.